

挨拶

司会（野間昇司）

修道高等学校入学50周年記念同期会を開催します。

峰崎直樹君が財務副大臣に就任されましたので併せてお祝いさせていただきます。

私は6組の野間でございます。不慣れではございますが、よろしくお願ひいたします。

本日は皆さん50年前に戻っていただき、すべて君付けで呼ばせていただきます。失礼、無礼の段お許し下さい。

それでは会に先立ちまして、今までに亡くなられました先生、同級生の物故者の皆さまに対して黙禱を捧げますのでご起立下さい。

《黙禱》

開会に際し、ごあいさつを同級生を代表して東京から来られましたお二人の方にお願ひいたします。

先ずは井川明君よろしくお願ひいたします。

挨拶（井川明）

私は、高校1年入学の時は3組（化学の古田先生）、2年の時は8組（英語の吉崎先生）、3年の時は1組（人文地理の東先生）でした。50周年記念と言うことですが、確かに15才で入学して50年経って今65才と言うことでございます。

50年前と言いますと丁度1960年、日本中は日米安保条約改定ということで騒然と言いますか非常に熱気に包まれていたと思いますが、まだ社会性に目覚めていなかったのか、そのあたりが記憶に鮮明ではありません。

ただ、高校入学と言いましても、私は峰崎君と一緒に編入組でして、一学期の間は夕方までの補習授業がありました。授業の方はそれなりにレベルが高く、毎日が補習と言うことで、なかなかゆとりがないというか、四苦八苦していたのではという気がしています。

それから併せて1960年と言いますと、広島県から池田勇人氏が総理大臣になられたことは記憶にあります。所得倍増計画であるとか、「寛容と忍耐の池田でございます」というのは記憶の底に残っています。これは少し経って、私にも余裕ができたせいかなと思っています。

本日は50年前の高等学校時代を語り、併せて30代、40代、50代という我々が歩んできた道を振り返りながら、或いは、更にこれからの60代、70代、本日は副大臣もおられますから、今後の60代、70代の我々の生活がいったいどういう風になるのかと言うことも大いに語っていただいて、お互いの交流を深めればと思っています。

本日は西尾（岡田）君、竹中君、土井君、それに準備いただいた役員の皆様、本当にありがとうございました。



司会

次に米田正巳君をお願いいたします。

挨拶（米田正巳）

私が確実に50年経って大きく増えたのは体重でございまして、高校時代と比較して、30キロ以上増えました。これでは確実にメタボで先も長くないと思います。



私は修道中学校からですが、6年間ほとんど絵を描いておりました。絵においてはほとんどものになりませんでした。美術部の一期後輩に、かの有名なロス疑惑の弁護士である広中君がいました。大学時代も絵ばかり描いて成績が悪かったので余り良い会社に入れなかつたので、勉強を始めまして30才になって公認会計士になりました。

私が関係しました会社はだいたい倒産しました。一部上場3社、2部上場2社が倒産いたしました。監査法人を退社しました原因も、粉飾まがいの事件に関与したことでした。退社した後で、監査法人もカネボウ事件などで倒産してしまいました。

たまたま、大学院の時の同期生が東京富士大学の副学長をしていて、拾われて来年3月の定年まで、8年間教鞭をとることになりました。来年の定年で、美術専門学校に入学して、いよいよ絵の勉強をしたいと思っています。

平成11年度から東京都の公会計制度の改革とかをやっております。平成18年度から、発生主義・複式簿記による東京都の財務諸表を作成、公表することができました。今日は峰崎副大臣がいらっしゃいます。民主党のマニフェストに「国の公会計を企業会計方式に改める。」とありますので、必ずマニフェストを完成していただきたいと思います。大臣を長くやっていただきたいと思います。在任中に、国、地方自治体の公会計制度を改革していただきたいと思っております。公会計制度の改革は、財政改革において遠回りになるかもしれませんが、わが国の将来のため、絶対必要な改革と考えていますので、峰崎副大臣、よろしく申し上げます。

私は現在、埼玉県川口市におりますが、岩国に兄弟、従兄がおりますので、同期会の為だけではなく、彼らに会えるのを楽しみに帰ってきております。今後、何年生きられるか分かりませんが、出来るだけ痩せる努力をし、毎日を楽しみたいと思っております。

最後になりましたが、土井君達、世話人の方々にいろいろなご準備していただき感謝しております。また、記念誌まで作っていただくとのこと、ありがとうございます。

司会

ここで峰崎直樹君の副大臣ご就任に対しまして、我々を代表してお祝いの言葉を高原宏之君をお願いいたします。

お祝いの挨拶（高原宏之）

このたびは峰崎君財務副大臣ご就任、心よりお慶び申し上げます。

私は、4組で入り4組で卒業した高原です。

以前は、産科婦人科の診察所での仕事でした。現在は、婦人科健診業務を行う勤務医です。



平成3年に峰崎君が、北海道選出の参議院に、また広中君は大竹市の市議選に出られるということで、両名を応援する会、青藍会の世話をさせていただきました。

昨年のリーマンショック以来の厳しい経済環境のもとで、峰崎君がこのような重要なポジションに就かれたことは、同期の者として大変喜ばしい事です。今後の活躍を大いに期待しております。副大臣就任中は、多忙を極められるとご推測致します。どうぞ、健康には充分留意して下さい。

本日は僅かの時間ですが、同期の者ととともに昔に戻ってくつろぎの時間を過ごして下さい。

なお後日、我々の心ばかりのお祝いの品をお送りしますので、ご笑納していただければ幸いです。

司会

それでは財務副大臣の峰崎直樹君にご就任の抱負等を交えてごあいさつをお願いいたします。

お礼の挨拶（峰崎直樹）

皆さんお久しぶりでございます。

元気そうなお顔を拝見して、本当に誰だったかなと、忘れている人が多いのですけれども、だんだんと顔と名前が一致して、そういえば3年1組で一緒だったなとか1年生の時に一緒だったなと今よみがえって来つつあります。



今日は高原前政藍会長から激励のお言葉をいただきましたけれど、皆さん、こうして集まっていたいてありがとうございます。

私は丁度3期目で18年になるわけでございますが、これまで随分長かったなと思いながら、やはりいつでも政権交代できる民主主義の文化を作るのが目的でありましたので、ようやくそれが達成できたのかなと思っております。

最初に修道時代の思い出から入るのですが、今も井川さんからありましたように、私は呉の東畑中学校から高校に編入で入りました。宮川君が来ていないようですが、宮川君とは幼稚園の時からずっと一緒だったので、一寸寂しい気がします。私の母がまだ生きておまして、昨日は家族一同が集まりました。今日はどうしても14時44分の新幹線で東京に帰り、19時から財務省で来週の打ち合わせが入っているので、本当に忙しい毎日であると痛感しています。

当初、私は呉から通学していたわけですが、3ヶ月くらいして8月には引っ越しして府中町に移って参りました。驚いたのは高等学校1年に入った時、最初の実力テストが5月にあったように思うのですが、成績を見て一瞬我が目を疑ったわけです。4百数十人くらいいた中、私は400番台の数字だったので、これはとんでもないところに来たと思いました。100番そこそこで広島大学に受かっ

ていたから、100番くらいまでに入らなければいけない、とても私立大学に行けるような家庭環境でなかったから、これは大変だということで、それ以来ある意味では非常に受験勉強に力一杯注ぎました。

途中で十二指腸潰瘍にやられて、高等学校2年生の時に切らないで治したのですが、芸備線の沿線の深川(?)というところに病院があって通っていました。夏、しばらくそこにいた折りには、毎日食べさせられるのが冬瓜の煮付けものだけだったので、それほど病はひどかったようです。それ以来、受験勉強も巡航速度を落としたりしました。

高等学校3年生の時にクラス別だったかどうか分かりませんが、教頭の岡島先生だったと思いますが、我々を集めて、将来君たちはどういう風になったらいいのかということを先生がいろいろ話されたことを覚えております。

日本の登龍門というのは東京大学法学部に行って大蔵省に入ることだ、これが日本の登龍門だという話を聞いて、私自身はどちらかということ会社の社長になろうと思っていたので、東京大学でなくて一橋に行こうと思っていたから、ヘエーそんなものかと思いました。

今ちょうど財務省に入って、本当に財務省出身者というのは大抵東京大学法学部が主流派になっている。東大の他学部の人は主流になれないで、法学部の人まさに登龍門として大変な頭脳の持ち主が沢山いることは間違いのないのです。

こうした中、政治主導ということで、今一番暇に見えるのは事務次官です。事務次官会議がなくなって、ようするに取りまとめの役割を我々副大臣、政務官が直接タッチする。そうすると今までそういうことをやっていた事務次官を中心としたところがなかなか表に出にくくなって、活躍場が少なくなっている。そうはいっても、やはりこういう役人の皆さんに活躍して貰わないとどうにもならないのです。予算会議であれ、私が今やっている税制改正もそうなのですが、来週から税制改正に入ってまいりますけれど、ほんとうに優秀な方がどうして最後は自分の省益にまみれてしまうのであろうかと考えさせられます。公務員制度というのはその省庁毎に採用して、そしてその人達が最後は事務次官一人にして、他の者を天下りをさせてゆく仕組みが出来上がっています。そういう意味で、公務員制度や内閣制度を本当に変えてゆかないと、なかなか日本の割拠主義というか、それぞれの省庁の縦割主義が直らないと思います。

我々が今政治主導で予算会議とかいろいろなことを組み立てようとしているが、どうしても予算要求が出てくると、省庁の要求がだいたいそのまま出てくるということで、ほとんどそこにマニフェストで国民に約束した切り込みが不十分に終わってしまう。省庁ごとの枠組みの中に、我々与党の議員が取り込まれてしまう。あるいは役人の下にそれを乗り越えられない状態だと思います。それを実現させてゆくことは大変なことだと思っております。これから11月、12月、12月の終わりには予算編成が終わりますが、この1~2ヶ月はまさに戦場と化すのではないかと思っております。それだけやりがいもあると同時に、激しいバトルが内部の人間、あるいは利害関係者の間で激しく行なわれるだろうと思っております。

その前兆はすでに現れておりまして、事業仕分けというやり方を今取っておりますけど、そうすると仕分けられる、それを無駄だと言われるのがたまらないという役人の方が沢山出てくるのは当然です。自分の利益というものを、自分の既得権というものを、あるいは自分にとって必要だと思っても、全体の中ではどうなのかということとはなかなか上手く行かないのです。そういう状況にあるということはご存知の通りだと思います。

副大臣に就任して、最近ではテレビや新聞紙上では大臣よりも副大臣とか政務官の方が出るようになってきているのは、実は民主党が野党時代に人材を育成し蓄積してきたことが理由としてあるわけです。自民党に求めたいのは、自民党は負けたと思っているけれど、ひょっとすると3年後4年後の選挙で堂々と取り返せるチャンスがあるわけで、肝心なのはそうしたことに備えて人材を育成することです。次は政策をどうやって磨き上げるかです。とどのつまりこの二つの商品、人材商品と政策商品を如何に良いものに作り上げるかということの競争で、勝てるか勝てないかということではないかと思っております。

このあいだ自民党総裁の谷垣さんとちょっとお会いして、是非人材育成と政策を磨き上げて国会で堂々と論戦をやりましょう、と言いました。谷垣総裁を前にして私がそういうことを述べるのも変な話しですが、そういう状況でございます。

今年も予算を組むのに苦労しておりますが、来年になるともっと苦労することが予想されます。来年になると税収不足で、歳入は減り、歳出は増え、個人的には予算は組めなくなるのではないかと心配しています。ということは、来年になるとどこかで負担を求めなくては行けない。つまり、行政を削減する削減すると言っても限界があるのです。

ここには医療に従事しているお医者さんの方が沢山おられますが、日本の医療費はおそらく世界の先進国の中で最も低い状態なのです。財政的には支出が少ない部類に入ります。ですから、これをまともなものにするには **GDP 比 2 %**位、医療費で言うと **10 兆円**、多分必要となってきます。

教育費は **OECD** の先進国平均が **5 %**、それが今日本で **3.5 %** ですから **1.5 %** 低いのです。**1.5 %** に **GDP** の **500 兆円** を掛けると **7.5 兆円** いる。そういう風に子育てだ、或いは介護だ、年金だと言うと、すぐに **20 兆**、**30 兆** という金が必要になってきます。

エッと思われるかも知れませんが、**25 兆円** で丁度 **10 %** の消費税です。消費税をすぐ上げるわけではないのですが、それくらい社会に必要とされている財源が非常に足りないというのが実態です。

今私達の世代はまだいいのですが、多分若い **20 代** あるいは自分の息子、娘を見て、みんなにこれから苦労をさせていいのだろうかと思うのです。それくらい社会の格差の問題あるいは社会保障が非常に疲弊している、あるいは地域社会に雇用がなくて本当にひどい状態になっています。我々が地域社会に行くと必ずそれらを目にします。

これを変えて行くのは社会全体で、みなさんに保険料を納めていただくこと、あるいは税を負担していただくこと、これがこれから必要となってくるんじゃない

いかと思っています。

これから一杯やって氣勢を上げなければならないのに、こんな話しをしたら何だと言う話しになるかも知れませんが、今年予算は増税をしなくてもなんとかギリギリ組めるかも知れません。しかし、税収は今年37兆円まで落ち込みます。もともと46兆円と見込んでいたのが40兆円に下がり、今37兆円になりそうで、10兆円近く予想より減るということです。来年の予算を組む時に景気が良くなるかしのれないから税収が増えるかという増えない。デフレですからね。デフレと言うことは名目額が減っていくということなのです。名目が減っていくことは私達の賃金が上がってゆかない、消費水準も上がってゆかない、消費税収も上がらない、所得税収も上がらない、法人税収はご存知のような状態です。そんな意味で、これから先はデフレからどうやって脱却するか、そして国民に如何に信頼される政府になって、その国民にこういう政府なら税の負担をしても良いなと思えるようにならないと、なかなか増税も難しいというのが実情でございます。

1960年を振り返って見た時に、私自身は安保闘争というのを広島で電車やバスから、広島大学の学生さん達がワッショイワッショイと動かれるのを見たことがあります。私自身は大学に入ってすぐ学生運動に興味を示しました。私は余りパクられることはなかったのですが、学生運動から労働運動へとずうっとやっていました。おそらく大学を出て労働運動に直接入って行ったというのは10年に一人という大学なのですけど、そのような中で、チャンスがあって議員になることになったのです。

冒頭申し上げたように政権交代のできるころまで行ったという意味では、私自身の役割はほぼ終わったのかなという風に思ったりもするのです。来年が丁度3期18年を迎えて、18年もやればいいんじゃないかと、4期目もやると24年やるとするのは長すぎるのではないかという声も地元では出ていますので、なかなか来年はどうか分かりませんが、自分としては財務副大臣という仕事を当面しっかりやって行けば本望かなと思っています。

どうも今日は皆さんありがとうございます。

司会

それでは乾杯に移ります。乾杯のご発声を我々の往年のバタフライの王者、馬場満男君にお願いします。

乾杯の発声（馬場満男）

こんにちは、馬場です。

この会には初めて出るので、50年という年からすると、とっくに忘れられているのかなと思っていたら、今年の幹事のお三方はちゃんと覚えていてくれて、乾杯の発声をしろということになりました。



私は京大の医学部に行きました。結構学生時代も忙しかったのですが、卒業したらもっと忙しい日々を送りました。

大学紛争があって1年卒業が遅れるというようなこともありましたが、最初は

研究畑に入りました。胸部研と言うところですが、そこで免疫学を、日本の走りですが、やっていました。一応ネイチャー誌とかJ. E. M. 誌に論文が通るような所まで行きました。

その次は研究職となって島根の大学に籍だけおいた時代もありました。やはり研究をやるとお金を稼がねばいけないのですが、京都の大学というのはお金を稼ぐのが下手でした。大阪、東京は上手いのです。と言うことで、これをずうっとやるには相当研究費を稼がねばならない、何十万、何百万と言う単位なのです。機械になると何千万なんです、そう言うお金まで稼がねばいけないので、この職を続けるのは私には無理だと思いました。私は酒の方が好きでしたし、辞めて開業しました。

開業すると今度はいろいろな雑用で、京都府の医師会の理事とかその辺の役やらされるようになってバタバタして、やっと終わって一寸暇が出来てフリーになるチャンスなんです、なかなかそうはいきません。

今も国民健康保険の審査委員を20何年もやっています、なかなかフリーにはなれないこともあって、皆さんに長いことご無沙汰しておりました。

去年、水泳部のOB会に出て、昔の仲間って良いものだな、と特に思うようになりました。やはり歳なんだな、と思います。

今日は峰崎副大臣のお祝いを兼ねて、皆さん沢山集まっていただきました。これを肴にして、皆さん大いに飲みましょう。

それでは乾杯いたします。ご唱和お願いいたします。

乾杯。

司会

報告を2点いたします。本日は突然の欠席が3名あり、出席者数は64名です。

欠席されていますけど、房原正明君、坪井高義君、世良伸武君からご寄付をいただいております。ご披露させていただき、お礼にかえさせていただきます。有り難うございました。

また、峰崎直樹君から清酒いただいております。心からお礼を申し上げます。

同期の有志の会を行っております。広島では三宅恭次君がRCC文化センターで桜の時期に春の花見会、夏のビアパーティを開催してくれております。ご参加希望の方は三宅君に参加希望を連絡いただければ、その時期にご案内いたします。

また、関東では内山君が関東地区同期会を開催していると聞いております。毎年、新年会を開いているとのこと。

それではゆっくりと最後までご歓談下さい。

司会

閉会に際しまして、今回で名簿を含む記念誌を発行するような同期会は最後といたしますことを申し上げます。

皆さんに原稿の方をご要請していますがよろしくお願いいたします。

今まで修道高校15回事務局を長年運営してお世話してくれました土井和士君に一つの区切りとして花束を贈呈したいと思います。

贈呈者は光村哲也君にお願いします。

光村哲也

皆さんを代表して花束を渡すことになりました。

女装でもしてこようかと思いましたが似合わないので止めました。

土井君は今日まで何回やってくれたか、土井君の呼びかけの度にこうしてみんな集まって楽しい時間を過ごすことができました。

土井君本当にありがとう。

伊藤八二氏



土井和士

一言お礼のご挨拶を申し上げます。

思えば21年前に事務局を承って、こういう同期会を6回、恩師の退職記念を3回、関東地区同期会と建築部会のお手伝い、そのほかにも色々やって来たのですが、ついに元気がなくなりました。

実は去年、名簿のある記念誌を発行するような同期会を開こうと思ったら、入院してしまいました。今年の6月にまた開こうかと思ったら、また入院しました。

こうした体調なので記念誌を発行するような同期会は、これを最後にさせて下さい。案内を送って来て貰うだけの同期会開催なら負担にならないので、これからはそうした形で行おうと思っています。

これからホームページを立ち上げ、それでもって報告するのようにしたいと思っています。どうも長い間、協力していただき有り難うございました。

ここにいる大原弁護士が、訴訟と言うのは同級生が一番騙しやすいから、そうした同級生のトラブルによるものが多いんだ。しかし、修道は利用する関係でなく、助け合う関係だからトラブルがない、と言ったことがあります。

これからも助け合う関係の同期会がいつまでも続くようなお手伝いをしたいと思っていますので、同期会活動にご理解とご協力のほどよろしくお願いします。

きれいな花をありがとうございました。



卒業時の高校校舎正門

